

神からの風と火——聖霊降臨

使徒言行録 2 : 1 - 4



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022 年 6 月 5 日

聖霊降臨日

上野聖ヨハネ教会にて

今日は聖霊降臨日。およそ 2000 年前のこの日、主イエスを信じる人々が集まって祈っていたとき、神の霊がその人々に激しく注がれて、教会が誕生しました。イエスは生前、また昇天に際しても、神の霊、聖霊を送ることを弟子たちに約束しておられました。この日、その約束が事実となったのです。

聖霊降臨——それは「出来事」です。皆で想像を膨らませたというわけではありません。だれかが瞑想のうちに悟りを開いたというのでもありません。聖霊降臨は、ある時間と空間の中で（おそらく紀元 30 年 6 月のある日曜日、エルサレムで）起こった「事件」です。弟子たちが一緒に経験した出来事です。使徒言行録はこの出来事をこのように伝えています。

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」 2:1-3

ここで二つの言葉に心を留めましょう。「激しい風」と「炎のような舌」です。この日弟子たちに注がれた聖霊がどのようなものだったかを、この二つの言葉が伝えてくれます。

まず「激しい風」です。この「風」は「息」という意味を持っています。激しい風とは強い神の息吹です。

「神の息」が聖書の中に語られているのは、人間の創造の物語です。

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」創世記 2:7

神が最初に人間を造られたときのことです。神は土の塵で人を形づくられた。けれどもまだ人は生きてはいません。横たわっているばかりです。その形づくられた人の鼻に、神はご自身の「命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」

神は何となくそうされたのではありません。偶然にそうなったというのではありません。神は、言葉と心を通わす相手の存在を願われた。それで神はご自身の意志を持って、決意して命の息を吹き込み、人間を創造されたのです。

最初の人間について言われていることは、わたしたち一人ひとりにも当てはまります。わたしたちもこの世に生まれ出るとき、神の命の息を吹き込まれました。息が通って産声を上げた。そうして生きる者となった。神はわたしたちの存在を願われ、決意して、わたしたちを生きる者とされたのです。

あの五旬祭のとき、集まっていた弟子たちはもちろん、すでに神の息を受けて生きていました。けれどもまだその息は細か

った。その人々に「激しい風」が、神の強い息吹が吹き込まれた。神はご自身の意志を持って、決意して息を吹きかけ吹き入れられました。神は教会が生きることを願われたのです。神の息吹が、神の霊が弟子たちに吹きつけ、一同皆に、また一人ひとりに及んでいきました。これが「激しい風」の意味です

もう一つ、祈っていた弟子たちが経験したのは「炎のような舌」です。炎。燃える火です。旧約聖書の中で思い出すのは、モーセに現れた火です。

遠い昔、エジプトで暮らすイスラエルの人々は強制労働に苦しみあえいでいました。モーセはゆえあつて遠く逃れ、ミディアン^{ミディア}の地で羊飼いとなって暮らし、すでに 80 歳となっていました。出エジプト記は次のように記しています。

「その間^{かん}イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。」出エジプト記 2:23-25

ある日モーセは羊の群れを追ってホレブの山に至りました。すると山の中に柴が燃え上がっています。燃えるものなどないはずの荒涼たる山の中なのに、火は燃えて燃え尽きません。モ

ーセが不思議に思って近づくと、燃える柴の間から神がモーセを呼ばれました。

「モーセよ、モーセよ」

主はモーセに言われます。

「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

出エジプト記 3:9-10

モーセは非常に驚き、恐れて、その使命から逃れようとしませんが、神の意志は固く、ついに屈服して神に従うことを決意して、エジプトに戻っていきます。

モーセを動かしたのは、神の燃えて燃え尽きない火、神の愛の火でした。エジプトに苦しむ人々を救おうとされる神の愛の火が、モーセに宿って、そこからイスラエルの民の出エジプトにつながります。

かつてホレブの山で燃えた神の愛の火。燃えて燃え尽きない神の愛の火が、あの日に集まって祈っていた人々に向かって燃えました。その炎は舌のように分かれ分かれに現れて、一人ひとりにとどまりました。心のうちに神の愛が燃えています。おなかあたりから全身に何か不思議な温かい、熱いものが起こっ

て、主イエスの臨在をはっきりと感じて喜びが沸き起こっています。神さまのこと、イエスのことを語らずにはいられなくなってきます。

使徒言行録はこう伝えています。

「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」2:4

「激しい風」、神からの風、神の息吹が弟子たちに吹きこまれました。「炎のような舌」、神の愛の火が燃えて、人々とどまりました。人々はこの上なく幸せを感じます。神の霊が弟子たちを強め、生かし、清め、動かして、イエスのことを周りの人々に伝えずにはいられない。そして言葉が通じていきます。不思議にも言葉の壁を越えて、主イエスのことが伝わっていく。こうして教会が誕生しました。これが聖霊降臨日の出来事です。

神からの風が強く吹いて吹き続けたので、神の愛の火が燃えて燃え続けたので、主の福音が今日のわたしたちまで伝わったのです。

今、教会も世界も多くの困難を抱えています。けれども神の風、神の息吹は吹いてやむことはない。神の愛の火は燃えて燃え尽きることはない。

かつて主なる神がエジプトで苦しむイスラエルの人々の現実を見て憐れみの情を起し、そこからモーセを通して救いの業を始められたように、今、主なる神が、わたしたちを顧みて憐れんでくださいますように。

お祈りします。

主よ、あなたの息吹をわたしたちにお与えください。あなたの愛の火でわたしたちを燃やしてください。聖霊を、弱ったわたしたちに注いで力づけてください。アーメン